

令和 8 年度 議会地域懇談会（佐見地区）

令和 8 年 5 月 2 9 日（金） 佐見ふれあいセンター

参加人数 3 5 名

テーマ「交流人口を増やそう！」「地域資源を発掘しよう！」

テーブルごとの意見まとめ

■ 1 番テーブル（伊佐治副議長）

佐見地区の交流人口を増やすため、アユ、地歌舞伎、山ト風ト、ガラパゴスカフェ、佐見川峡キャンプ場など、既存の地域資源を生かした発信が必要との意見が出されました。キャンプ場を拠点に、釣り体験、ドッグラン、マウンテンバイク、ホテル観賞、カヤックなどの体験メニューを充実させる案や、地元の人の作品販売、ジビエ、民泊、神社巡りなど、佐見ならではの魅力を組み合わせた誘客の提案がありました。

■ 2 番テーブル（野尻議員）

フットサルやキャンプ場を通じて、町外・地域外から佐見を訪れる人がいることや、林業・農業体験、山の魅力、地元住民との交流が外部の人に喜ばれていることが共有されました。一方で、人口減少、働き口の不足、子どもの進学に伴う転出、光回線などのインフラ不足、教育機会の地域差による負担など、定住に向けた課題も挙げられました。廃校を交流拠点として活用する案や、パンフレット・SNS による発信、外部と地域をつなぐ人材の必要性についても意見が出されました。

■ 3 番テーブル（杉山議員）

佐見川峡キャンプ場を交流の拠点として活性化することを中心に、飲食店など周辺施設の不足、地元にお金が落ちる仕組みの弱さ、インターネット予約や PR 不足が課題として挙げられました。一方で、尾城山や成山の登山道、稲田川のホテル、山ト風ト、有機農業、木工、地歌舞伎、農村風景、佐見川での水遊びなど、キャンプ場と組み合わせられる資源は多く、観光ルートづくりや季節ごとのイベント、体験ツアーの企画、有志によるプロジェクトチームの立ち上げが提案されました。

■ 4 番テーブル（三戸議員）

獅子舞・地歌舞伎、山菜・キノコ狩り、山登り、川遊び、鯉の赤煮や鮎の甘露煮づくり、ヘボ・ミツバチの養蜂など、佐見ならではの体験ツアーを企画し発信する案が出されました。また、空き店舗の利活用や、地域独自の「佐見の道と川を守る会」の活動への参加を通じた交流、キャンプ場を拠点としたまちづくり、自然や人の良さが伝わる PR 動画の作成、佐見の入り口に大きな案内看板の設置など、地域の魅力を外へ伝える取組が必要とされました。少子化対策として、出会いの場づくりを求める意見もありました。

■ 5 番テーブル（佐伯議員）

キャンプ場はリピート率が高く、ガラパゴスカフェや山ト風トなども人を惹きつける場所として挙げられました。佐見川、紅葉、朴葉寿司、アユ釣り、登山道、城跡、古道、地域の昔話など、自然・食・歴史・趣味に関わる資源を生かした発信が必要との意見が出されました。旧小学校や教員住宅を農業体験・宿泊・貸出住宅などに活用する案、草刈りや農作業をイベント化する仕組み、釣ったアユをその場で食べられる場所づくり、地歌舞伎への外部からの参加など、体験と交流を結びつける提案がありました。

■ 6 番テーブル（梅田議員）

人口減少、少子化、医療アクセス、自治会や行事の維持など、佐見地区が抱える現実的な課題について意見が出されました。外から人を呼び込むだけでなく、今いる住民が住み続けられることを重視し、保育園や福祉サービスなどを一体的に集約する仕組みが必要との提案がありました。交流人口・関係人口を増やす方法として、登山や山菜採り、短期の山村留学、リモートワーカーや二拠点居住者の呼び込み、U ターン促進、移住希望者と地域をつなぐマッチングの仕組みづくりが挙げられました。

■ 7 番テーブル（藤井議員）

移住者を中心に話が進められ、佐見に移住した人が地域の人に親切にしてもらい、山仕事を教わるなど、佐見での暮らしに良さを感じていることが共有されました。一方で、同じ地域に住んでいても、移住者と地元住民が実際に話をする機会は少なく、互いの思いを知る場が不足していることも確認されました。交流人口や地域資源を考える前に、まずは移住者と地域住民が交流する場を設けることが必要ではないかとの意見が出されました。

■ 8 番テーブル（田口議長）

尾城山や高天山への登山、キャンプ場での鮎釣りの様子の YouTube や Instagram の発信など、SNS を活用した情報発信の強化が提案されました。また、食のイベント、犬連れの人を呼び込

むドッグラン、魚釣り大会、虫取り、ホタル観賞など、子どもや家族連れを対象にした体験イベントの案も出されました。養蜂や木工の特産化、山林の広葉樹化による環境改善、地域施設の活用など、地域資源を掘り起こし、発信力を高めることが交流人口の増加につながるとまとめられました。

佐見地区のまとめ・特性

佐見地区では、美濃白川ふるさと体験村（佐見川峡キャンプ場）を中心に、自然、農林業、食、歴史、文化、人材など、身近にある地域資源を再評価し、交流人口や関係人口の増加につなげようとする意見が多く出されました。特に、キャンプ場のPR強化、体験型イベント、SNSによる情報発信、廃校や空き店舗の利活用など、具体的な提案が多く見られました。一方で、人口減少、少子化、医療・交通・通信などの生活インフラ、担い手不足といった課題も共有され、外から人を呼び込むだけでなく、今いる住民が住み続けられる地域づくりの重要性が確認されました。